

## 国際関係論と聖書〔I〕

山口女子大学 コーネリアス 飯田

### 1章 なぜ聖書と国際関係論なのか

#### 1. 「落ち穂拾い」の社会学的意義の例

フランスの農村地帯を愛し、「晩鐘」や「落ち穂拾い」など良く知られた絵を残したミレーは一時期上流階級から嫌われ者とされたという。社会主義者と見做されたことが、嫌われた理由であったと。それは見当はずれの非難だったが、彼の絵の題材が引き起こした誤解だった。

だが、「落ち穂拾い」などの情景を描いたことが、なぜ当時のフランス人に社会主義者を連想させたのだろうか。わが国の画商たちは、「勤勉な農民たち」の穀物の収穫の仕上げの情景と銘打って「落ち穂拾い」の絵の複製を広告している。もしその解釈が正しいなら、資本主義的でこそあれ、社会主義とは縁遠い図式であるまいか。

この謎は聖書<sup>1)</sup>が解いてくれる。泰西の名画がしばしば聖書にテーマを見出している例に洩れず、「落ち穂拾い」も旧約聖書、ルツ記のシーンを基に創作したものだ。落ち穂を拾っている女性はナオミとルツ、姑と嫁だが二人とも夫を失い貧困で、農地なぞ所有してはいない。農民でもない。彼女達は

1) 聖書の定義としては伝統的なプロテスタントの立場では創世記に始まる旧約聖書39巻と、マタイによる福音書に始まる新約聖書27巻を指す。

他人の畑に入り込んでいるのだ。落ち穂を拾うことができる理由は、同じ旧約聖書のレビ記19章に記載された、貧困者の救済を目的とした法律による。次のように書かれている。

あなたがたの地の実りを刈り入れるときには、畑のすみずみまで刈り尽くしてはならない。また、あなたの刈り入れの落ち穂を拾ってはならない。あなたのぶどう畑の実を取りつくしてはならない。また、あなたのぶどう畑に落ちた実を拾ってはならない。貧しいものと寄留者のためにこれを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。

(9—10節)<sup>2)</sup>

寄る辺ない、明日の食物にも困っている女性たちが、聖書の神の言葉を守る農民たちの優しさの故に、落ち穂を拾い、穀物を蓄えて生き延びる、それがミレーの構図だった。画家は、裕福な上流階級を批判したのではなかった。だが、効率主義の追求を特徴とする生産革命の結果の富を蓄えている人びとは、根こそぎ刈り取って自分のものにするたぐいの経営をしていた。そこには「落ち穂」はない。それで、このような題材が富裕な人の目には当てこすりと映ったのだった。当てこするのは、画家が社会主義者だからだ、と。

## 2. 「ヨベルの年」とパールハーバー攻撃の記念日の例

このように、日本と西欧との間に「落ち穂拾い」を巡ってミスコミュニケーションがあっても、比較的無害だ。ユーモラスですらある。だが、もし聖書を知らないことから国際関係論の構築の上での誤解が発生すれば、無害では済まないことが多いことは想像に難くあるまい。

例えば「50周年記念」という概念だが、同じレビ記には「ヨベルの年」という概念が規定されている。それは慶ばしい祭りの年で、自由と放免、許し

2) 日本聖書協会刊、『聖書』1955年(旧約)、1954年(新約)による。

と休息を意味する。だが、聖書にもアメリカの歴史にも明るくない東京の評論家の中には、パールハーバー攻撃の50周年記念を機に、アメリカは日本叩きを強めると本気で警告した者もあった。

そのような「予言」の弊害は、多くの場合それが成就することにある。予言しなければ問題にもならなかったであろう事柄が、予言に触発されて歩き出す事例は、辟易するほど多い。東京が騒げば、ワシントンが黙っていられようか。そこでその予言はある程度まで現実になりそうになってしまった。

パールハーバーに赴いて50周年の記念を行ったブッシュ大統領は、幸いにも、そのような贖予言には動かされなかった。アメリカの価値観が働いた独立戦争の50周年や、南北戦争の50周年記念の時と同じく、日米開戦の50周年も、半世紀を通して培われた和解と友好関係を喜ぶ、新たな関係の出発の日となった<sup>3)</sup>。聖書の指示する通りだったのだ。

### 3. 国際関係の姿勢制御装置に聖書を組み込む

このように、一見簡単な概念にも彼我の間に180度の違いがある場合がある。したがって、その違いを確認し、外交姿勢の制御に役立てることは、有益な作業である。況や、「侵略戦争」<sup>4)</sup>とか、「戦争犯罪」<sup>5)</sup>など、重要な概念

3) 事実この式典でブッシュ大統領は、かつて昭和天皇とマッカーサー元帥の間に存在した相互の敬愛の念にまで言及している。*Public Papers of the Presidents of the United States, George Bush 1991*, US Government Printing Office, Washington, 1992, p. 92, "Remarks to WW II Veterans and Families in Honolulu, Hawaii" 参照。

4) 日本が降服した1945年8月15日以降、東南アジアでイギリス、フランス、オランダなどは熾烈な植民地奪回戦争を展開した。一般に欧米諸国はそれらを侵略戦争と認めていない。その理由はいくつか挙げられようが、概ね西欧植民国のキリスト教理解が根底にあるといえよう。すなわち、かれらは太平洋戦争を遡る三世半にわたる植民支配を神より授かった権利と誤解している。したがって、旧日本帝国による挑戦は、かれらの神聖な既得権益への「侵略」だった、と錯覚した。そのような判断の基準はキリスト教ではなく、キリスト教の誤解であり、また中世以前からの西欧の歴史が培った世界観でもある。

5) 「侵略戦争」の定義が注4で述べたように不確実である以上、戦争犯罪の定義も恣意的になる。

については、国際関係の姿勢の制御は必須であり、そのために概念の違いを確認する作業は極めて重要と言えよう。

ここで「彼我」と呼ぶものは、西欧と日本であり、聖書文化圏と日本、と言い換えてもよい。日本は明らかに非聖書文化圏に属する。それは優劣や善悪の問題ではないことは、言を待たない。いや、後述するように、むしろ非聖書文化圏に聖書の教える類の倫理や資質が温存され、聖書文化圏の国ぐには社会的に疲弊し、経済的に衰退しているのが偽りない現状なのだ。

してみると、非聖書文化圏のわれわれが聖書を知る努力をすることには、二重の意義が潜んでいるといえよう。一義的には、われわれ自身の国際関係論の構築に当たって、「彼ら」が拠って立つと少なくとも標榜している価値観を究めることである。そして、二義的には、その価値観とわれわれ自らのエトスとの接点を見極めて、より効果的に「彼ら」に協調と公正を求める素地を固めることである。

## 2章 聖書と国際関係論の関わり概観

### 1. 「歴史の終わり」は聖書の概念

日本は、その旺盛な経済活動のゆえに、アジアをはじめ世界の諸地域や、多くの国ぐにに強い影響を及ぼしてきた。バブル崩壊後の不況や、外的に仕掛けられた円高、また米の凶作などに代表される気掛かりな現状にも関わらず、この国が国際社会で持ち続けるであろう影響力は衰えを見せていない。一国が他の国ぐににたいして持つ影響力を、経済面に限らず、政治、社会、そして国際協調などの切り口で捉え、総合的に判断するならば、日本は今まさに、地球規模の舞台で主役を演じ始めていると言えよう。大学の経済学部においても、国際関係論の素養が必要とされる所以である。

だが、わが国では、国際関係論と呼ばれている学問と、ユダヤ教、キリス

ト教の教典である聖書との関わり合いは、希薄なもので見られている。中世はいざ知らず、新しい世紀にほんの数年を残すに過ぎない二十世紀の世界では、むしろこの古典が国際関係論に貢献することは絶えてありえない、との観察がかなりの妥当性を持つかに見える。

加うるに、国際関係論そのものが、学問の世界では新参者であり、国家と主権、力の均衡、核兵器、平和の問題など、現代の多様な外交、防衛問題を対象としている。その発生からして、「砂漠という厳しい自然環境で生まれた、呵責なき一神教」<sup>6)</sup>の奉じる「苔むした聖典」と見なされている聖書とは、なんの関わりも無いと断定されても、さして不思議ではない。

事実、日本に限らず、世界の多くの研究者、ジャーナリストが、そのように否定的な前提にたって国際関係を論じている。古典と哲学の分野の碩学で、しかもアメリカ合衆国国務省という極めて実務的な環境に身をおいていたフランシス・フクヤマ氏もその一人だ。氏は、名声をほしいままにした四年前の論文に「歴史の終り」という題名を付けた<sup>7)</sup>。続いて“The Last Man”（「最後の人」）と題する論文も発表し<sup>8)</sup>多くの評者から絶賛を浴びたことは、記憶に新しい。

これら二つの論文の持っている傾向は、氏が選んだ題名が的確に示唆しているといえよう。「歴史の終わり」という概念も、「最後の人」という概念も、実は、聖書と聖書に基礎をおくキリスト教神学では、中心的に扱われる重要なテーマである。だが、フクヤマ氏は、これらの論文を展開するにあたって、旧、新約聖書のもつ歴史の終わりや最後の人という概念を用いたのではない。

6) この一神教の起源に関する通説は、ユダヤ教、キリスト教については間違っている。ユダヤ教は、（またイスラム教も）イスラエル民族（そしてアラブ民族）の先祖をアブラハムとするが、かれは肥沃なメソポタミアの出身であり、かれが移住したカナン、すなわち現在のパレスチナは旧約聖書によれば「乳と蜜の流れる」豊かな土地だった。かつてはライオンも生息できる地域があった。砂漠ではなかったのだ。

7) Fukuyama, Francis, “The End of History” *National Interest*, Summer 1989

8) Fukuyama, Francis, *The End of History and Last Man*, The Free Press, New York, 1992

キリスト教の功罪には言及したが<sup>9)</sup>、これらの概念を学問的に、すなわち批判的に取り上げることも、参照することすらもしてはいない。むしろ、意識して同じ用語を使用することによって、ユダヤ教、キリスト教が宗教組織として、また学問の府として、それらのキーワードに託して数千年のあいだ標榜してきた歴史観や、人と社会の救贖を扱う概念を覆す試みをした、と評するべきであろう。

聖書に縁遠い文化圏でも比較的よく知られているように、旧約聖書は、歴史の終わりは世界終末戦争によってもたらされる、とする。その終末概念は新約聖書にも受け継がれ、ヨハネの黙示録などに詳記されている。ハルマゲドンでの戦い<sup>10)</sup>である。

また、聖書に淵源を見いだす宗教が支配的な国ぐにの市民なら、おおむね誰もが認識していることだが、旧約聖書での最後の人という概念は、神が地上に遣わす下僕である。世の終わりに現れ、天に代わって歴史の終焉の主演を演じる使者であり、メシア、すなわち救世主を指す。それは、ユダヤ教やイスラエルにおいては、未だに待望されている「人」である<sup>11)</sup>。

ユダヤ教の教典をそのまま「旧約聖書」として自ら奉じ、それに新約聖書を加えて聖書として奉じるキリスト教においては、この「人」は過去に実在したとされる。それは、この「人」が新約聖書では「最後のアダム」<sup>12)</sup>と呼ばれ、旧約聖書・創世記の最初の人<sup>13)</sup>と対比され、ナザレのイエス・キリストと同定されるからだ。

これら二つの概念のいずれも、フクヤマ氏が、同じ言葉に盛った概念とおよそ無縁である。

日本はさておき、キリスト教の文化背景をもっている西欧諸国、聖書文化

9) 聖書自体ではなく、キリスト教徒たちの抱いた終末思想については、上記の著作の56頁に数行、解説的な言及がある。

10) ヨハネの黙示録16章16節参照

11) イザヤ書9章6, 7節, 同53章, 61章, エゼキエル書34章など参照。

12) 「アダム」は人という意味の言葉である。コリント人への第一の手紙15章45節。

13) 創世記2章19節, およびコリント人への第一の手紙15章45節参照。

圏と呼ぶべき地域の国々の学者たちから氏の論文に寄せられた高い評価は、評者ら自身の聖書観を雄弁に物語っていると言えよう。氏の見解の支持者らにとっては、聖書の持っている諸概念は、現代人による歴史認識の形成、現実の歴史の展開と行方、また国家と国家の関わり方などに関与するものではない。すなわち、聖書は国際関係論には基本的に irrelevant だと見做されている、と類推すべきだ。

フクヤマ氏の意見は、母国アメリカにおけるよりも、ヨーロッパでより高く評価されている、との観察がある。もしそれが事実なら、それは理の当然であろう。なぜなら、政治や外交の実際、またその評論の場で聖書の諸概念が持つ影響力は、現在のアメリカでは、ヨーロッパにおけるほどには衰えていない。アメリカの思想系譜のほうが、ヨーロッパのそれよりも聖書の諸概念の影響をより多く温存している。したがって、非聖書的ともいえる氏の概念には、潜在的な警戒感を抱くのであろう。

日本の論壇では、歴史観や、人と社会の救贖を扱う概念に関しては、アメリカ型よりはヨーロッパ的な思考が展開され、また、よりよく理解されると言えよう。

## 2. 政治、外交の立役者たちと聖書

だが、ヨーロッパ型だとアメリカ型だとを問わず、聖書は国際関係論に無関係ではない。聖書文化圏に属する国々の外交、政治の指導者の発言や行動には、彼らの理解する形での聖書の歴史認識、倫理観、正義感などが滲み出てくる。その一例として、ブッシュ大統領がパールハーバーで、日米開戦50周年の記念の際に取った態度については1章で述べた。

より顕著な例として、中東和平というテーマを挙げることができよう。

アメリカのカーター、レーガン、ブッシュという三代にわたる大統領が、鋭意イスラエルとアラブ諸国の間の和解を追求した裏には、彼ら三人に共通のキリスト教信仰があることは否めない。明白にも世俗的な側面はある。すなわち石油資源を巡る戦略、ソヴィエト連邦との力の均衡、その他の地政学

的な要因は事実である。だが、この三人のアメリカ大統領が中東和平に注いだ力と情熱を、中東が持つ戦略面での重要性からだけで説明し尽くせるとするのは誤りである。

彼らは聖書の意味する歴史の終わりを意識していた。カーターもレーガンも、しばしばハルマゲドンに言及した。「わたしが見張り番にたっている時」に熱核戦争による、文字通りのハルマゲドンを起こすような顛末になったら、神に対して申し開きが立たない、という心理が働いていた。平和を保ち、繁栄をもたらすことは、合衆国憲法を擁護すると等しく、大統領の責任の大きな部分である。就任にあたり、この三人の大統領はその責務を、他でもない聖書に手を置き、神を引き合いにだしての宣誓をもって受諾している。人類の一員としての思いに加えて、天与の責任を持つ管理者として、ハルマゲドンを恐れていた人達なのだ。その意味では、歴史の終りを極力回避することが、彼らの政治、外交の前提だったのだ。

カーターは、個人的にはキリストによる贖罪を信じ、「新生」の必要を唱える福音主義者だ。福音主義の信仰の顕著な一面は、終末における天地の破壊と、新しい天と地の到来を確信するにある。そのような新天新地は、超常的な秩序を意味する。だが、カーターは政治哲学の面ではラインホルド・ニーバーの神学の影響を受けて、「社会による救済」を信じていた。それは現世的な、非超常的な、直線的進化の所産としての秩序である。

したがって、この大統領にあっては、ハルマゲドン回避は、二重の重要性を帯びていたといえよう。第一に、前述の熱核戦争を回避する責任の重要性がある。それは、終末に向けたカトストロフィックな破壊の時期が未だ満たない、と確信をもって判断する宗教的な側面である。それと平行して、自らのよって立つ政治哲学の要請として、社会の進化に少しでも貢献しようという、現世的な目標の側面がある。大統領職を退いた今も、鋸とハンマーを手にして貧困な人びとのために家屋を建築する力と情熱を説明するのが、この後者である。

他方レーガンにあっては、一見稚拙とも見紛うほどの理想主義に根ざして、

就任当初から鋭意米ソ両国による核兵器の全廃を目途した<sup>14)</sup>。この点に限って言うならば、かつての彼の批判者たちも、最近では彼の取った立場、その業績を多少は評価し始めたようだ。レーガンのタカ派スタンスは、その前提として核廃絶への悲願があつてのことだったのだ<sup>15)</sup>。それと同じ情熱を、レーガンは中東和平にも注いだ<sup>16)</sup>。理由は、かなりの程度までカーターの場合と共通で、世界の平和と繁栄への責任感に見いだされる。

また、情緒的にはこれら二人の前任者より一層純粹に聖書の信仰に立つと思われるブッシュ前大統領は、任期中、イスラエルとパレスチナ人の間の和解を進める手だてを尽くしていた。

それでは、現大統領はどうだろうか。ケネディ大統領の崇拜者をもって自ら任じるクリントンだが、フランクリン・ルーズヴェルトや、その直接の後任者ハリー・トルーマンと並んで、聖書の価値観には最も縁遠い内容の国際関係理論を信奉する、典型的な民主党系大統領と、後世の歴史家から評されるのではなかろうか。

---

14) 「タカ派レーガン」というレッテルは一面のみを捉えている。確かにアメリカの核戦力を強化するために巨大な国防支出を行い、あえて財政赤字の増加を許したレーガンは希代のタカ派と見えた。だが、もし米ソの雪解けを当初から画策し、ソ連に大幅に遅れを取っていた自国の核戦力を改善することにより、ソ連との軍縮交渉の進展をたしかなものにしようと企てたのならどうか。ブッシュ政権下のマルタ島における歴史的な関係修復と核軍縮へ顕著な進展とは、前政権の政策の結果だったという定説に、さらに信憑性を加えるだろう。その「前政権の政策」の一部として、1980年の就任当時、レーガンが既にソ連に核兵器廃絶の提案をしていたと仮定したらどうか。すると、ブレジネフがそれに応じなかった故に、レーガンが次善のオプションとしての核戦争改善に走ったと想定し得ることになる。そこで、レーガンは10年後のマルタ会談を予見していた、現実的ハト派だった、という構図が浮かび上がる。これは、決して荒唐無稽な仮定ではなく、後世実証される可能性がある。

15) 最近SDIテストに成功したという報道はブラッフだったという説が物議を醸した。だが、ワインバーガー元国防長官もコメントしたように、もしミスインフォメーションを用いての情報競争に旧ソ連が陥れられたのなら、それも冷戦構造の一部だったのだ。

16) イスラエル軍による目に余るアラブ弾圧を憂いたレーガンは、ベギン首相に、「これはホロコーストだ」と抗議したと伝えられる。

その縁遠さ加減は、内政面で見るとすれば、弾性同性愛者の軍隊からの排除を非合法化する試みなどに顕著だ。この試みは、聖書の価値観とは正面から対立する、甚だ顕著なものである。聖書では、男性同性愛は性的な頹廢の極致として裁かれている。その猖獗を究めていたソドム・ゴモラの町への神の審判は、「硫黄の火」で焼きつくすことだった<sup>17)</sup>。

アメリカの一般大衆のエトスは衰えたと言われる。だが、大統領の価値観が聖書のエトスから乖離しているのに較べれば健在だ、と窺わせたのが、米軍における同性愛者の件をめぐる起きたクリントンの人気低下である。

クリントン大統領も聖書を良く引用する。だからといって、かれが聖書の価値観を尊重している、とは言えない。かれの政策が雄弁に物語るように、クリントンは自らの価値判断を聖書より上位に置き、聖書の文言を引用することで自らの政策の信頼性を高めようとしていると思える。それに反して、カーター大統領は聖書を真剣に紐解く政治家だった。そして、その四年に続くレーガン、ブッシュの12年間の共和党ホワイトハウスは、相対的に見て聖書の価値観を尊重した。したがって、カーター就任に始まる16年間は、近来の世界政治の舞台に絶えて例のない時代だったのかもしれない。

### 3. 聖書の国際関係への影響の具体例

#### 1) 1948年のイスラエル建国・超常性の認知

国際関係論の通説からすれば、1948年のイスラエル建国は、かなり聳肩目にみても不自然な出来事とされる。西欧諸大国、なかんずくアメリカが、中東における石油などの利権を護り、かつ当時のソ連との力のバランスを保つための橋頭堡として発生せしめたのがユダヤ人国家、イスラエルだ、という。アメリカ自らと同じく、「作為的」な由来の国とされる。

一般に、作為の反対は自然だが、超自然性、超常性もまた作為の反対と言

17) 創世記19章参照。4節にある、ソドムの男たちが用いた「その人を知るであろう」という表現は、性行為を要求している言葉である。この場合、「その人」は男性であるから、男性同性愛の強要を意味する。

える。もっとも、超自然性は明らかに自然性の反対でもある。では、超常性は作為の何だろうか。答えは有神論の立場からは容易だ。神の作為を人間は観察し、無神論の立場からは自然と名付ける。だが有神論の立場からは神の作為と認識されるのであって、その現実はいよいよ超自然性を帯びる。超常性は作為性でもあるのだ。

聖書の言葉を額面どおりに受け止めれば、1948年のイスラエルの建国は人間の作為によるよりは、むしろ超自然的な現象とされる。しかも、正当性のある現象とされる。それは、有神論からすれば、神の作為によるからである。

カーター就任からブッシュ退職に到る16年間、三人のアメリカ大統領に共通する歴史観の重要な一面で、非聖書文化圏の論者たちがとかく見逃し勝ちなのは、イスラエル建国の正当性という概念である。彼らにとっては、1948年のイスラエル建国は、旧約聖書の預言が文字通り成就したことに他ならない。しかもそれは、これら大統領たちに特有の認識ではなく、多くのアメリカ市民や一部のヨーロッパやイギリスのキリスト教徒の持つ見解である、聖書の言葉を額面通りに受け止めるユダヤ人やキリスト教徒なら、ほとんど例外なく持っている歴史観である。

イスラエル民族の破滅、離散は、民の背教に対して神が下した罰として、神からの使者である預言者たちによって、旧約聖書の時代に既に予告されていた<sup>18)</sup>。また、そのように離散した民が、神の憐れみを受けて、いつの日にか再びイスラエルの地に集められることも約束されていた<sup>19)</sup>。

だが、そのようにしえの予言の信憑性に疑問を差し挟む学者は多い。更に、諸般の作為、世俗的な手だてを経て実現したイスラエル建国を、予言の成就、すなわち超自然的な出来事と判断することを巡っては、議論が当然ある。しかし、聖書を信じる者、あるいは聖書を思想と行動の規範と戴く者にとっては、予言は信頼性を帯び、その成就是議論の余地のない現実なのである。国際関係論と聖書の関わりは、このように現実である。

18) エレミヤ書31章10節、エゼキエル書5章10節など参照

19) エレミヤ書31章参照

## 2) 1993年のイスラエルと PLO の和解・倫理要請の実効性

預言とその成就というような、超常的な面だけが国際関係論に対する聖書の発言だとするならば、そのような説は主観的という誹りを免れまい。だが、事実は超常的な側面はむしろ希で、国際関係論に対する聖書の発言は道德面に最も顕著に見られる。聖書の示す倫理的な要請が国際関係論に関わることの方が、超常性が関わるより遙かに多い。

今年の九月にイスラエルと PLO が相互に承認しあうという快挙にでたとき、日本のマスコミの多くはこれを青天の霹靂と捉えたのだった。だが、聖書の言葉をその額面通りに受け止める多くの人びとにとって、これは十分に予期できたことだった。いや、予期する以上に、切望し、また実現への努力を惜しまなかったことだった。

この良いニュースに続いて、ヨルダンのフセイン国王は、ある日本の新聞のインタビューに応じた。彼は、ヨルダン国とイスラエル国が協力して、パレスチナ住民の経済発展のために港湾、空港、道路など諸種のインフラストラクチャーを建設することも可能だと語ったという。直接話題に登ったのは、ヨルダンとイスラエルが共に面している、紅海北東端のアカバ（エイラット）湾である。両国に跨がる施設を開発し共用する構想は、画期的といえよう。イスラエルを敵視し、数次にわたって戦争を挑んだヨルダン側が、今このような発言をするには、それなりの根拠があるに違いない。おそらくイスラエル側の感触を十分に弁えた上での発言であろう。世界の平和のため、またパレスチナ人の安住のために歓迎すべき展開である。

このような歩み寄りの精神が、降って湧いたものではないことは、少なくともイスラエル側に関するかぎりは明白である。聖書が、イスラエル民族に対する神の言葉として繰り返し述べていることの一つに、寄留の民、すなわち生活を共にする異民族に慈しみ深く接すべし、という要請がある<sup>20)</sup>。聖書の説く正義 (righteousness, justice) には幾つかの属性があるが、慈しみはそ

20) 出エジプト記12章48, 49節, レビ記19章33節など, 極めて頻繁。

の最たるものである。そして、寄留の民に慈しみ深くあれとは、イスラエルとは何の関係もない異民族の人びとでも、もしイスラエルの生活圏の中に留まることを望むなら、決して排除してはならない。むしろ親切に遇し、居心地よいよう仕向けよ、という意味である。

### 3) 中東横断「ハイウェイ」の予言・東地中海経済圏形成の兆し

#### a) 聖書の言葉に権威を感じるイスラエルの指導層

聖書の倫理は理想であり、イスラエルを取り巻く現実の過酷な状況では、そのような理想は実行に移せる筈がない、と考えるユダヤ教徒も決して少数ではない。また、現にイスラエルはパレスチナ人の土地を奪って建国し、パレスチナ人を排除することに全力を傾けている、とするのが日本では一般に受け入れられている解釈である。

だが、実情はかなり異なる。1988年の初秋のころ、一人の日本人旧約聖書研究家がイスラエルを訪れ、イスラエル外務省の高官数人、情報、防衛関係者、ヘブライ、テルアビブ両大学の教授たち、宗教学者、および元ヨルダン西岸行政官などと会見し意見交換した。会談の主要なテーマとして彼は、ヘブライの教典である旧約聖書の、イザヤ書第19章末尾<sup>21)</sup>に述べられている「ハイウェイ」を挙げたのだ。

彼は、日本政府の中東地域での開発途上国援助の一端として、エジプトの首都カイロとヨルダンの首都アンマンを結ぶ「ハイウェイ」の敷設にODA資金を用いることを提案していた。途上国ではないイスラエルは、日本の援助の対象とはならないが、地政学的に見てそのようなプロジェクトはイスラエルの賛同なしには成立しない。そこで、まずイスラエルの指導層の感触を打診したのだった。

イスラエル政府筋の反応は押しなべて、極めてポジティブだった。日本のイニシャティヴでそのような「ハイウェイ」が企画されれば、イスラエルとしては大いに歓迎する、というものだった。一人の、諜報関係者とおぼしき

21) 後述のように、23節から25節にある。

高級官僚は、イザヤ書への言及に直面したとき、深い感動を隠しきれず、目を潤ませた。そのような「ハイウェイ」への期待、そして隣国から慕われる国家となることへの強い願望は、まさに宗教的なものだったのだ。それは、いにしへの聖書の言葉は現在も権威を持つと信じないなら、起こり得ない感動である。

## b) 預言と中東の経済発展

### i) 高速幹線道路

日本とイスラエルの関係をより緊密なものに育て上げ、なんらかの形でアラブとイスラエルの対立の緩和に資したい、と考えていた日本人は少なくない。件の研究者もその一人で、そのイスラエルでの打診の報告は、東京在の国際問題シンクタンクと、その主管者である有力政治家に報告された。

だが、1988年末の時点では、「ハイウェイ」コンセプトは一種荒唐無稽なものに見えた。そののち湾岸戦争を経て、このコンセプトは一つの可能性を宿すものと見られるようになり、さらに二年を経て具体性を帯びてきた。上記のヨルダン国王の発言などからもその現実味は読み取れる。

そのような経緯を踏まえ、イザヤ書第19章の言葉の真意を探ることは有益と思われる。第19章の文脈は複雑で、三つの民族国家が登場し、しのぎを削るような闘い、神による審判とゆるし、祭礼の展開と国際的交流など、いわば典型的な古代「国際関係論」のテーマが盛られている。その「ハイウェイ」に関わる文節を次に引用する。

In that day shall there be a highway out of Egypt to Assyria and Assyrian shall come into Egypt, and the Egyptian into Assyria, and the Egyptians shall serve with the Assyrians.

In that day shall Israel be the third with Egypt and with Assyria, even a blessing in the midst of the land:

(Isaia 19: 23-24)<sup>22)</sup>

[その日には、エジプトに発してアッシリアに向かう街道が存在するだろう。そしてアッシリア人はエジプトを訪れ、エジプト人もアッシリアに行く。そしてエジプト人たちはアッシリアの人びとと共に礼拝する。その日には、イスラエルは、エジプト、アッシリアと並んで、三者の一つとなり、その地域のただなかで、祝福となる。(ヘブライ語<sup>23)</sup>より私訳)]

ここで第一に注目したいのは、「街道」、または現代風に言うならば「ハイウェイ」が存在している、という描写である。預言者イザヤの時代には存在しなかった道路が、出来ている。すなわち建設される、という予言である。

ここでいう「ハイウェイ」は、原語では[メシラ]で、小径や街路、または「人道的」などという場合の比喩的な道[デレク]などと区別され、土を盛り上げて敷設した道路、シルクロードなどに見られる主要な道路を意味する。この言葉の現代用法には鉄道という意味すらも含まれる。

この地域にかつて存在した、ないしは現存する交通施設で、この描写に該当するものは無い。イスラエルとエジプト両国を結ぶ道路は細く、幹線にはなっていない。

イザヤ書第19章の言葉は、予言されてこのかた未だに存在するに到っていない「ハイウェイ」が、「その日」には存在し、しかも機能しているという意味だが、「その日」とはいつのことだろうか。遠い未来であれば別だが、もし現在がその「ハイウェイ」が敷設される時代だとするなら、それは高速大量運搬施設としての、複数車線のリミテッド・アクセス高速道路と理解することができる。

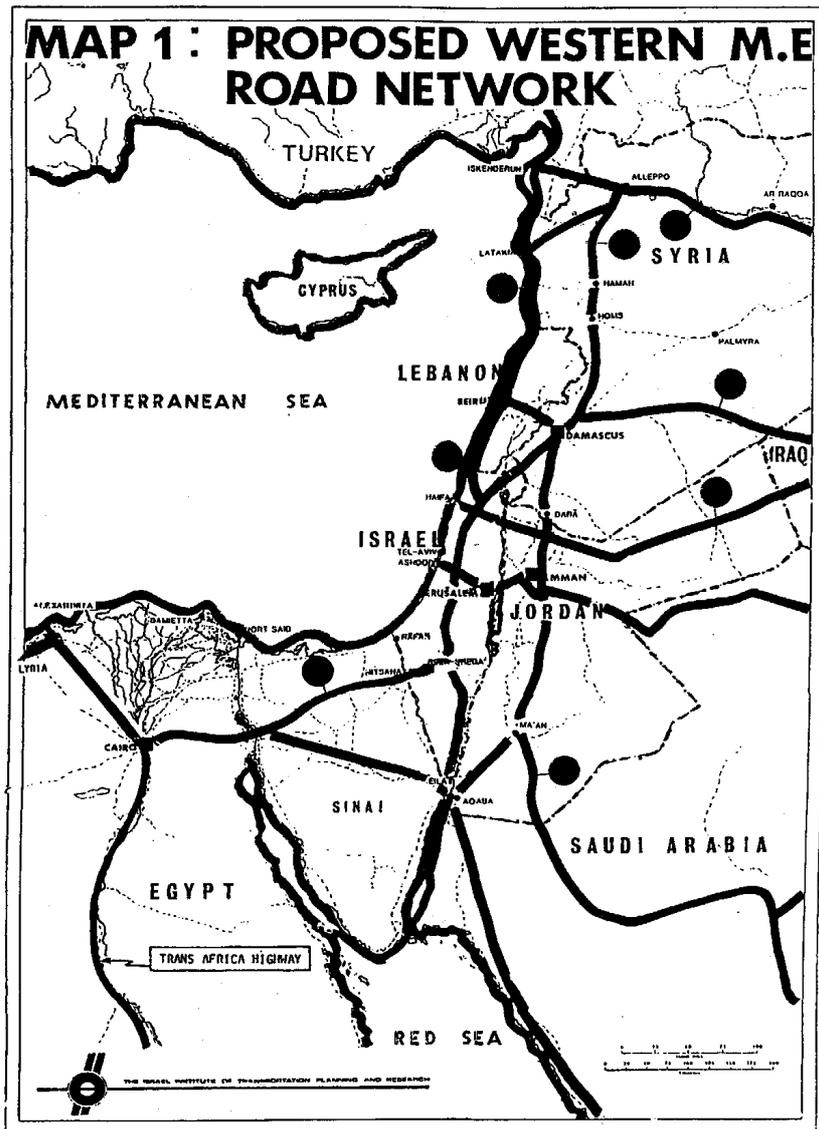
22) The Holy Scriptures, Hebrew Publishing Company, New York, NY, p. 601。ここで、多数存在する日本語訳の旧約聖書からは引用していない理由は、一つには翻訳にばらつきがあり、各おの一長一短で、特定の訳書に頼ったのではヘブライの原典のニュアンスを十分伝えられないからである。ここに用いた英訳文は、英語圏のユダヤ教徒が用いるものの一つで、信頼性が高く、原語を忠実に再現している。

23) 原語は、*BIBLIA HEBRAICA*, Ed. by Rud. Kittel, Stuttgart, 1961 による。

現代に舞台を据えての解釈をさらに進めるならば、アッシリアと呼ばれている国家は、今日のイラクである。地理的には、エジプトとイラクを結ぶ「ハイウェイ」は、まさにイスラエルを通過せざるを得ない<sup>24)</sup>。

イスラエルを通過し、ヨルダンを経てイラクへと向かう構図である。そこで、これを中東横断高速道路と命名することも妥当だろう。そしてイスラエルは否応なしに「その地のただなか」でこれらの国ぐにと関わることになる。

24) *THE PEACE PROCESS*, The Regional Transportation Issues, Prepared by J. Even, et. al., The Israeli Ministry of Transport, 1993, Map 1 参照。この地図の示すように通過は横断、縦断ともに可能である。



その「地」は地球全体と解釈できなくもないが、再び現代に舞台を求めるなら、中東地域の意味ととるのが適切であろう。

ii) 経済牽引力としてのイスラエル

第二に注目を引くのは、イスラエルが隣邦諸国と関わる仕方が、「祝福」だ、という点である。この言葉は、特定の祭壇が設置されて始められる、イスラエルの神への礼拝、という文脈で用いられている。それゆえ、この祝福は一義的には、多分に精神的なものだ。とはいえ、精神面の祝福の現実の展開として、豊かな産物、近隣との交易、集団の繁栄、平和な家庭と社会、人格の尊厳、そして長寿と名誉などの現世的な祝福抜きでは、イスラエルの神の祝福は語れない。旧約聖書では、祝福とはかなり即物的な概念である。

したがって、再び現代的な文脈での解釈を進めるならば、エジプト、ヨルダンのみではなく、シリアやイラクさえも包含する広汎な地域で、イスラエルがなんらかの方法で経済的繁栄の牽引力を提供する、という意味と理解できる。

ここで想起されるのは、イスラエルと隣邦諸国の関わり方が、「祝福」だったことは、太古の短い一時期を除いてはない、という現実である。そして、このイザヤ書の予言がなされた時期を紀元前のどんなに早い時期と推定しても、それ以後に国家としてのイスラエルが近隣諸国に祝福であった事実はない<sup>25)</sup>。

そのような道路がヨルダンに地中海への容易なアクセスを与え、北アフリカのイスラム教徒たちにメッカやメディナへの巡礼の旅を格段容易、かつ安全なものに変えることはあきらかである。また、エリコとガザ地区の両方が直接の受益圏となるようにその「ハイウェイ」を設置することは無理ではない<sup>26)</sup>。それは、自治を始める両地区にとっても、イスラエル自体にとっても

25) 一部の聖書学者らは「イスラエル」を国家としてでなく、精神的な実体、すなわちイスラエルの神を信じる者たちの集団と捉える。そのように抽象化されイスラエルが同様に抽象化された近隣諸国、すなわち隣人にとって祝福に満ちた存在となる、というのがこの予言の真意だ、とする。

幸いなこととなろう。

イスラエル政府筋がそのような「ハイウェイ」を積極的に歓迎する背後には、近隣諸国に好感を与える国家となることへの宗教的な願望が<sup>27)</sup>、経済的な現実にも則しているという僥倖があることを見逃すわけには行かない。

古代に記録された予言がこのように実現し、地中海の東岸一帯が一つの経済圏の様相を呈する兆しは既に表れている。その当面の推進力となるのは他にもない、先進工業国イスラエルである。パレスチナ暫定自治の一環としてのイスラエル—パレスチナ経済協力は、極めて広汎にわたり、交通、運輸はそのほんの一例にすぎない。水利、電力、オイル・パイプライン、鉄道建設、さらには教育、観光などの開発が計画されている。アジア研究所の池田明史研究員は地域の経済協力構想を分析し、長期的な展望としては「東地中海経済圏」のような経済ブロックの成立も、あながち夢でないかも知れないと結論している程である<sup>28)</sup>。

してみると、国際関係論の形成に占める聖書とその予言の位置は、決して空想的なものではないことが分かる。

26) 具体的には、M-6号高速道路が企画されており、イスラエル運輸省所轄の公団、CROSS ISRAEL HIGHWAY CORPORATIONがその企画を担当している。同公団は、イスラエル・PLO 和平の暁には、M-6ハイウェイはヨルダン西岸とガザ地区、アラブ系イスラエル人の集落、レバノン、シリア、エジプトの各地域との間の交通をも捌き、またガザ地区とアラブ系イスラエル人の集落、レバノン、シリア、エジプトの各地域との間の交通をも扱う結果になると予測している。

27) ただし、宗教的な傾向は単一ではなく、過激な要素もイスラエル国内に見受けられる。その一例は本年二月にヘブロン市でおきたユダヤ教過激派によるイスラム教徒の虐殺事件である。忘れてはならないのは、穏健派ユダヤ教徒にとっては過激派はまさにナチスなのであって、このタブーとされている表現が彼らによって過激派に投げつけられ、おおかたの同意をえたことは、イスラエルの願望を雄弁に物語っている。

28) 池田明史、「パレスチナ暫定自治交渉合意後の経済的展望」、潜在力具現化への諸条件、p.10、月刊イスラエル、日本イスラエル親善協会刊、1993年10月参照